View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Asia University Academic Repositories

アジア研究所所報
ISSN　0385-0838
第 138 号
発行所
亜細亜大学アジア研究所
東京都武蔵野市境 5-24-10
電話 0422（54）3111
郵便番号 180-8629

愛するわが故郷―延辺

李　東哲

◆十八年ぶりの「復職」

二〇〇七年二月十八日、私は十八年近く暮らした東京を後にし、午後三時半ごろ成田空港を飛び立ち、経由地の仁川空港に向かった。当日は仁川空港で一泊し、翌日の朝、ほこりや煙にまみれた雪に覆われている延吉空港に降り立った。日本に行く前に教鞭を取っていた中国・延辺大学で私の復職願いを快く受け入れてくれたからである。

出発の日はちょうど中国の春節（旧正月）に当たる日だった。私は平和島駅で都営浅草線―京成線へとつづく京浜急行に乗り込んだ。中国だったら至るところで天空をつんざかんばかりに爆竹を鳴らしたり、山海珍味がいっぱい並んだ食卓を囲んで食べたり、飲んだりして大騒ぎする、一年中もっともにぎやかな祝日のはずなのに、カレンダーからとうに旧暦が消えた日本はいつもと変わらぬ風景のどんよりとした静かな一日だった。

ところで、一九八九年三月三十一日、北京空港を飛び立って成田空港に降り立った翌日も「記念すべき日」だった。消費税導入制度により、消費税が実施された日であったのである。おかげで、到着した日は義兄たちが前日買い込んでおいた美味しいビールや日本酒などを酔いつぶれるほど飲んだものである。

実は、私の日本行きは「留学」ではなく、いわば「引揚者」の家族としてであった。そこで家内の姉の家族三人と私の家族三人と、六人の「小団体」の旅立ちだった。その経緯といえば、北朝鮮咸鏡北道茂山生まれの義父（妻の父）が幼いころ生きる道を求めて両親と延辺に移住、三十年代に東京に留学、かの地で日本人と結婚した縁故で、戦前中国に戻ってきたにもかかわらず、戸籍が抹消されなかったからである。そこで、幸か不幸か、日本行きは旅費、ホテル代など、すべて日本厚生省の「国費」で賄われ、日本に行ってからも半年間、「生活保護」を受け、半年後は家族三人で東京・大田区にある2DKの都営住宅を斡旋されたのである。

◆私と延辺

日本では「延辺」という地域名が一つの市と勘違いされ、よく「延辺市」と呼ばれたりしているが、正しくは「延辺朝鮮族自治州」であって、その所在地がおよそ五十万人近い人口を有する延吉市である。もっとわかりやすく言えば、延辺朝鮮族自治州は吉林省を九つの行政地

〈目　次〉

○愛するわが故郷―延辺　……李　東哲……(1)
○書　評　菊池 嘉晃 著『北朝鮮帰国事業「壮大な拉致」か「追放」か』……畑山 康幸……(4)
○中国東北経済開発と延辺朝鮮族自治州　……山本 忠士……(6)
○「国際中堅企業」の登場(24)　中国でロシアと日本を繋ぐ～藍宝石木業有限公司～　……西澤 正樹……(8)
○日本海横断航路　―その可能性と課題について―　……呉淑儀サリー……(10)
○『アジアの窓』　……小林 熙直……(12)

域に分けた一つで、六つの市と二つの県からなり、総人口218万人余である。そのうち、朝鮮族人口は八十万人余で、総人口の三六・八％しか占めていないが、延吉市の朝鮮族人口は二十八万人余で、およそ総人口の五十八％を占めている。延吉市は自治州政府の所在地であるだけに、いうまでもなく延辺地域の中心地であり、中国朝鮮族の中心的な存在でもある。朝鮮族メーンの延辺大学も延吉市にある。

私は延辺の龍井市（以前は「延吉県」）に属する「銅仏寺」という田舎町に生まれ、五歳か六歳のとき、同じく龍井市に属する「老頭溝」というところで大学に行くまで暮らした。その後、「文革」を経て、大学入試制度回復後、第一期生（通称「七七級」と呼ばれている）として一九七八年三月、吉林大学日本語学科に入学した。この大学入学に際しても一つ面白いエピソードがある。

私は小学校五年生終わりのごろ、「文革」でおよそ半年間休学させられ、その後中学（中高一貫性）に「進学」したのであるが、中高合わせて四年半で「卒業」した。勉強らしき勉強ができなかったのは言うまでもない。そのおかげで、卒業するまで「外国語」とは全く無縁で、正直「外国語」という概念さえも当時は耳にしたことがなかった。その後、自分が育った田舎に戻って農作業に従事していたが、あるとき偶然中国で出版された日本語版の『人民中国』を目にし、漢字混じりの「虫のような変な文字」に目を奪われたのだった。これが「日本語」との最初の出会いであった。ああ、日本語ってこういう文字なのか、と妙に感心したことをいまでもはっきり覚えている。しかも、その雑誌は当時延吉市から「下放」（再教育という名目で、幹部が農村や工場などに行かせられ、肉体労働に従事せられたこと）されて、私が住んでいた村にやってきた義父（妻の父）が購読していたものであった。この偶然の出会いによって私は初めは日本語、その後は英語を独学することになり、数年後にはそのおかげで大学日本語学科に入学したわけである。

◆私と延辺大学

延辺大学は一九四九年三月に創立され、現在十九の学院（日本の学部に相当する）からなり、在籍学生者数が三万人近い、朝鮮族メーンの総合大学である。そこで、いままで学生募集に際しても朝鮮族七割、その他の民族三割という比率を原則としてきた（ここ数年は朝鮮族学生の志願者が減っているので必ずしもこの比率であるとは限らない）。延辺大学は一九九六年中国教育部「211工程」、すなわち全国百の重点大学の一つに選定され、二〇〇一年は中国教育部から西部開発重点建設大学に指定されている。つまり、地理的に中国の中心部からかなり離れている国境都市に位置していることもあり、以前は「延辺大学」ときたら、「『延安（陝西省）』にあるの？」と尋ねられるくらい知名度が低かったが、いまは韓国語ブームと相俟ってその名が全国的に幅広く知られるようになったのである。

私は一九八二年一月、大学卒業後、日本語教師として延辺大学に配属されることになった。当時は大学教師、特に外国語教師が不足していたので、大学を卒業して大学で教鞭を取ることはごく普通のことだった。ところで、私は死んでも教える仕事だけはやりたくないと思った。内気な性格だったし、口下手だったので教師には不向きだと考えたからである。当時は今と違って特別な理由がない限り、職業を自由に選択する権利はほとんど不可能だった。そこで、泣き泣き延辺大学に赴任し、その後も何とかして延辺を脱出するために他所の大学院を受験したりしたが、ことごとく失敗に終わったのである。いま振り返ってみれば、いかに自分が幼稚だったか、恥ずかしい限りである。

私は一九八二年二月から一九八九年三月日本に行くまで最初は教養科目としての日本語、後は日本語学科で教えたが、その間一九八三年八月から一九八四年六月までの一年間、通称「大平班」の第四期生として北京で教員研修を受け、それがきっかけとなって日本語研究に興味を持ち始め、延辺大学に復帰後、わずか数年の間に二十篇近い論文を発表し、好評を博したのである。その後、日本に行ってからも「中国朝鮮族研究会」（一九九九年発足）の初代の代表を務めたり、延辺大学東京事務所長兼延辺大学校友会長を務めたりしてずっと延辺大学と何らかのつながりを持っていた。このような諸々のことも後日、延辺大学に復職できる下地になったことは二言を待たない。

◆延辺の日本語教育

ここ数年間は様相が大分変わってきている

が、これまで延辺に居住している朝鮮族は敦化市などとくに漢族の多い一部地域を除き、日常用語は基本的に朝鮮語で、高校までの学校教育も朝鮮族は「朝鮮族学校」（授業用語は朝鮮語）に通うのが普通であった。そして、「文革」が終わって大学入試制度が回復された七十年代の終わりごろから中学（高校を含む）における外国語教育は主に漢族学校では英語、朝鮮族学校では日本語というパターンで実施されてきた。当初は、学校教育において再び外国語科目が導入されたこともあって外国語教師がかなり不足していた状況であったにもかかわらず、日本語教育は日帝時代に日本語を覚えた年配の教師をはじめ、延辺師範専科学校（短大）や延辺大学日本語科の卒業生などによって支えられ、わりあい順調に進み、教育の質も他の地域に比べて相対的に高く、そのおかげで大学進学率も全国ナンバーワンの実績を誇っていた。

つまり、朝鮮語で学校教育を受けている学生はほぼ百パーセント朝鮮族で母語が朝鮮語であること、日本語は朝鮮語と語順が似ているので朝鮮族の学生にとって日本語が習得しやすいこと、良きにつけ悪しきにつけ、老世代の多くが日帝時代にある程度日本語を覚えているので多かれ少なかれその影響を受けていることなどで大学入試制度回復以来二〇年近く、日本語は中国朝鮮族学校の唯一の外国語科目として注目され、大学入試、日本留学、合弁企業への就職などで大いに役立ったことは否めない事実である。

ところが、九十年代半ばから朝鮮族中高における日本語学習者は次第に減少し始め、九十年代後半からは英語学習者が急速に増えたので逆転現象が起き、いまでは外国語科目はほぼ英語にとって代わられている状態である。その主な理由として、特に名門校の理工系受験には外国語科目として英語が求められること、統一試験の日本語入試問題が以前より難しく、日本語成績が低下傾向にあること、保護者の英語教育への重視、日本留学や大学進学後英語が全く分からず苦労することへの反動などが挙げられる。しかし、日本語科目を英語に切り替えた弊害も少なくなく、数年前から中高における日本語教育再生の動きが見られはじめ、延吉市でも実験的に小学校の外国語教育に一部日本語を導入したり、中高で英語学習と同時に、選択科目として日本語科目も導入したりしているが、まだまだ軌道に乗ってない。その打開策を至急講じるべきである。

◆延辺大学日本学研究所―課題と展望

延辺は中国朝鮮族の中心地であり、延辺大学は朝鮮族教育の唯一の拠点である。将来、中国、日本、ロシアと北朝鮮を結ぶ図們江開発が順調に進めば外国語ができ、自分の専門分野もある大量の人材が必要である。これらの人材は言うまでもなく、地元の唯一の高等教育機関である延辺大学が育成しなければならない。大学側も延辺大学の地理的位置や民族的特色を生かすべく、将来の構想として韓国・朝鮮学、日本学、ロシア学を延辺大学発展の三本柱として近年注力している。日本学研究所ではこのような大学側の意図を視野に入れ、二〇〇七年から相次いで在瀋陽日本総領事をはじめとする日本政府関係者の講演会、日本学研究を主とした中日韓朝比較研究国際シンポジウム、延辺地域の日本語教育再生のための日本語教師研修会や座談会などを開催し、二〇〇八年からは日本国際交流基金の援助による「延辺ふれあいの場」の運営も手がけている。また、亜細亜大学、明治大学、弘前大学など日本の各大学や研究機関と交流協定を結んで、学術交流、留学生相互派遣などを行っている。しかし、韓国・北朝鮮との交流に比べて、日本との交流はかなり遅れを取っており、いかにしてこの開きを縮められるかが今後の課題の一つである。

現在、延辺大学には日本語専任教師が四十名おり、その他に政治、経済、教育、芸術や理工系など幅広い分野で日本に留学し、学位を取ってきた教師も多い。日本語だけでなく、日本のことについて熟知しているこれらの人材は、将来延辺地域における日本語教育発展のための貴重な人的資源であり、日本学研究を活発に推し進める上でも不可欠の立役者である。今後、日本学研究所ではこれらの人的資源を十二分に利用しながら、日本の大学や研究機関との交流の間口をさらに広めると同時に、日本学中心の日・中・韓（朝）・ロの対照研究、日本学中心の大学院修士課程設立、中国朝鮮族地域の日本語教育に関する調査・支援などを推進し、日本学研究センター設立への土台にしたい。そのためには、日本の提携大学や研究機関からの物心両面による支援が是非とも必要である。【了】

（りとうてつ・延辺大学日本学研究所長・教授）